

日毎の祈りのために

わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、
来るべき都を探し求めているのです。
だから、イエスを通して賛美のいけにえ、
すなわち御名をたたえる唇の実を、
絶えず神に献げましょう。

(ヘブライ13:14-15)

私たちの教会では、主日の礼拝ごとに、その週の召天者を記念し、神の民に連なる信仰を新たにしています。また、聖餐卓を囲む半円には目に見えない聖徒たちがいることを覚えつつ、主の聖餐に与っています。

この「祈禱書」は、こうしたキリスト教信仰に基づいて日常的に故人を記念することを目的として、編纂されました。教会で葬儀を行った遺族が、日本的習俗の中にあってどのように死者を記念すればよいのか、との素朴な問いに答えたものです。

聖書はあらゆる死者祭儀、いわゆる故人崇拝を堅く禁じています。聖書を命の糧として生きるキリスト教では、死は罪の支払う報酬としての被造物の帰結だからです(創世記3:19、ロマ6:23)。人間は死によって神仏になるのではないのです。ゆえに死者は拝まれる対象ではありません。キリスト教では、死者もまた、神を拝む存在であると考えています。聖書に、「イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるものがひざをかがめ、また、あらゆる舌が、『イエス・キリストは主である』と告白して、栄光を父なる神に帰するためである」(ピリピ2:10-11)とあります。

神の御子イエス・キリストが十字架で死んで、復活したことで、決して神をほめたたえることのない死者(詩篇88篇)が、神をほめたたえる者とされたのです。より正確に言えば、“いのち”は神賛美の中にあるのです。神をほめたたえる者は、死んでも生きるのです。生きていて神をほめたたえる者は、決して死なないのです。神をほめたたえる賛美の中で私たちは、この地上にあって天上の賛美、永遠の“いのち”に連なるのです。

日常の場で故人を記念することは、生きるにしても死ぬにしてもキリスト・イエスにあって神をほめたたえる私たちの生活の一部であり、主日礼拝における主の聖餐に連なるものです。キリストの贖いの恵みが私たちの神賛美の根拠だからです。ゆえに、故人を記念する「朝の祈り」と「夕べの祈り」は、主の聖餐に連なることを目指しての祈りの形をとります。主の祭壇で、私たちは故人と会うことができるのです。

なお、日毎の祈りの冒頭に掲げた聖句は、秋田榎山教会で共に礼拝をささげる信徒たちが「祈禱書」作成のために寄せてくださったものを核にしました。また、祈りの言葉は「ミサ典礼書」を参考にしました。この「祈禱書」が用いられることで、目に見えない聖徒たちと共に主の食卓を囲む聖餐体験が深められることを祈りつつ。

付随

アウグスティヌスの母モニカは、旅先で臨終を迎えた時、悲しむ息子たちにこう言い残しています。「このからだはどこにでも好きなところに葬っておくれ。そんなことに心をわずらわさないでおくれ。ただ一つ、お願いがある。どこにしようとも、主の祭壇のもとで私を想い出しておくれ」(山田晶訳『告白』)。

「祈禱書」手引き

- ① 聖句:「朝の祈り」には新約聖書、「夕べの祈り」には旧約聖書を配置しました。
- ② 詩編:「朝の祈り」は悔い改めの詩編を中心に、「夕べの祈り」では感謝と賛美の祈りを中心に配置しました。